かるもし

52
麻生区文化協会会報

絵・佐藤勝昭　文・岩田輝夫

月読神社

麻生川が鶴見川に合流する亀井橋付近から北の方角四百メートルほどの所にこの神社がある。だるま市で知られる麻生不動尊の裏山の上にあるため、百段ほどの階段を上らなければならない。

鳥居をくぐると、石燈籠の先の両側にある狛犬がこの神社と境内を守っていた。二月半ば過ぎの冷たい風の日で、境内には誰もいなかったが、神楽殿の下で餌を探していた二羽のツグミが迎えてくれた。この野鳥は私の好きな冬鳥なので何となく爽やかな気分になった。

さて、この社は応仁戦乱の苦悩にあえぐ領民のため、天文三年（一五三四年）、当時の麻生郷の領主が五穀豊穣を祈願し、伊勢皇大神宮別宮の月読宮の文霊を勧請して創建したと伝えられている。富士山の宝永大噴火・天保の大飢饉の際も領主・領民挙げての発願により社殿を修復し、祈祷を行ったと云われている。

大正五年に熊野・白山・日枝の三神社を合祀し、麻生神社となったが、月読の社号が全国的にも稀であったことから、昭和八年に再び元の月読神社の名称に戻すことになったという。

麻生区制三十周年を迎えて

初代麻生区長　西村俊行

麻生区が多摩区から分区して、本年七月で三十周年を迎えます。発足当時の麻生区と現在の麻生区とを比較するとき、あまりの変容とすばらしい発展に驚くばかりです。

発足当時の昭和五十七年（一九八二年）の人口は、約九万六千人でしたが、三十周年を迎える今日では、十七万一千人余となり、著しい増加を示しております。このことは、まちに大きな活力を生み起こし、喜ばしい現象ですが、見方をかえますと、人と人とのふれあいが薄れ、日常生活にも近隣との連帯が問題になって来ているように思えます。このことはこれからの大きな課題といえましょう。

麻生区文化協会は、このことに意をもちいて今後の活動に力をそそいでいただきたいと存じます。「文化・芸術のまちづくり」は発足当時からの区の目標でもあり、「明日にはばたけ麻生」の合言葉のもとに、市民が一丸となって前進してまいりました。この推進の力の重要なはたらきを麻生区文化協会がはたしてくれたことは、多くの市民の知るところと存じます。

三十周年をふりかえってみますと、発足当時に夢みた将来像は今日十分に達成され、感無量なものがあります。現区長が今後のさらなる発展に向けて、非常にするどい視点を五十一号紙で発表されていますが、全く同感です。どうか力強いバックアップをお願い申し上げます。

さて、私は区役所退職後（昭和六十一年三月）、川崎新都心街づくり財団の事務局長に就任し、川崎市の委託により、川崎新都心快適環境計画推進協議会の委員（事務局長）、ついでかわさき芸術のまちづくり実行委員会委員（事務局長）等を歴任しました。芸術文化に関する様々なるイベント・講演会、芸術祭等々数多く行なってまいりましたが、市民の方々の多数参加を得たことは、最大の喜びでした。芸術文化の分野で御活躍の方々が積極的に協力援助して下さったことは、本当に感激いたしました。多くの芸術文化に活躍されている方々をはじめ、各分野で活躍されている文化人の方々が、すべての企画に積極的に参加いただけたことを忘れることがありません。これらの実行に当っての準備段階の会議には麻生区文化協会からも出席いただき、貴重な意見をたまわりました。企画実施に当っては文化協会会員に多大の御協力をいただいたことも忘れることが出来ません。

おわりになりましたが、麻生区文化協会が発足をみるまでには幾多の経過があります。区誕生の前から芸術文化関係者、多摩区の文化協会に属していた会員の方々、その他この地の有識者等が集まり、麻生区文化協会設置の話合いがもたれていました。区発足後は毎月のように研究会がもたれ、活発な討論の結果満場一致で、昭和五十九年十一月十日に麻生区文化協会が誕生しました。その後の活動には市民の共感をよび、多くの参加をよぶこととなりなした。

昭和六十年（一九八五年）に麻生市民館・図書館がオープンしてからは、麻生区文化協会も発表の場を得て順調な歩みをつづけ、今日に至っております。

活力と魅力に満ちあふれるすばらしいまちづくりに向けて、麻生区文化協会の積極的な活動を心から期待してやみません。

会報「からむし」によせて

麻生市民館長　入口　茂

麻生区との「縁」は、かれこれ十年は越えたでしょうか。その間、麻生区にお住まいのさまざまな分野で活躍されている方々とめぐり合え、仕事でご一緒できたこと、時には仕事を超えたお付き合いをさせていただいたことに深く感謝し感慨深い思いを巡らせているところです。

さて、麻生区は市内でも有数の緑地や農地など、豊かな自然環境に恵まれ、一方で新百合ヶ丘駅周辺を中心に商業施設等が集積され、近隣には良好な街並みが形成されています。さらにアートセンターや映画大学、昭和音大などの芸術文化関連施設や学校なども多く、文化人や芸術家も多数居住しており、KAWASAKIしんゆり映画祭や麻生音楽祭など、多彩な芸術文化活動がとても盛んな地域だと思っています。このような地域の資源や人材、環境に恵まれた麻生区において、麻生区文化協会の果たしてきた役割や実績についてはあらためて言うまでもありませんが、私が麻生区文化協会のさまざまな活動の中で、特に注目し、その存在意義を高めているのは、小学生を対象として実施している「夏休み親子教室」、古くからの麻生の伝統文化を今に引き継ぐ「あさお古風七草粥の会」、日頃の文化芸術活動の成果を広く地域に公開し広めている「文化祭」活動でしょうか。麻生区ならではの地域特性を活かしたもののように思いますし、今後も是非とも継続してほしい事業と思っています。

とかくさまざまなジャンルの文化芸術活動が内向きな活動になりがちなところを、広く地域を意識した、公開性のある開放的な活動の方向性をぶれることなく続けられることを大事にしてほしいと思っています。さまざまな活動での成果や、そこで培われた宝を広く地域に還元しようとする試みは、今後の文化協会活動を地域の中へ浸透させ、広めていくえうえで大きなキーワードとなると思います。

また、現在地域ではさまざまなボランティア活動や地域の活動が行われています。文化芸術活動が単にその分野領域に留まることなく、他の分野で活動しているさまざまな地域団体と連携した取組みに広げていくことも必要でしょう。そのことで相互に相乗効果が得られそうですし、限られた地域人材や資源を有効かつ効果的な活動へつなげ、さらに地域に根ざした活動へと、身近に芸術文化の香りが感じられる地域づくりに貢献することも可能となるかもしれません。

麻生区文化協会の何がわかっているんだ、とお叱りをうけそうですが、わずか一年間の関わりやお付合いの中から感じたままを述べさせていただきました。麻生区が誕生して今年で三十年を迎えます。麻生区文化協会は、昭和五十七年、麻生区が多摩区から分区し、その二年後に市民館・図書館合築の麻生文化センターが開設してまもなく設立されたように伺っておりますが、その設立の早さやまとまりの良さ、加えて分野、ジャンルを超えた連携協力体制など、麻生区文化協会の持つ求心力の強さには目を見張るものがあります。やはりそれらを支えたのは、個々のジャンルや領域での地道な地域での連携した活動があり、その積み重ねの成果であろうと思っています。

今後も麻生区文化協会が菅原会長を中心として、ますますのご活躍ご発展をお祈りするとともに、麻生区の芸術文化のまちづくりや地域活性化、地域の振興など、大きな核となり推進役を果たされんことを期待しております。

「今を生きる」という想い

逍汀　笠原恒子

私共夫婦の所属している凌雲社の「凌雲書展」に、毎回来観して批評をして下さる評論家がおられる。ある時、「よくやった。」と大声を発せられた。会長賞を戴いた「風のなかに巣をくふ小鳥」（大手拓次詩）。はかない恋心をこのように表現した意外性に魅了されてその詩心に迫ろうとした作品だ。

この作品を、私の古希を祝って「花美術」という絵画や陶芸などを主とする季刊誌に、主人と二人見開きに掲載してくれた。九州地方でよく売れている品のある美術誌で、書が中心ではないから後の方での掲載であった。

発売三ヶ月を過ぎた頃、「あの本まだ売れているんですよ。」と電話をしてきた。「高村光太郎・智恵子特集をするので、又ご夫婦で前の方へ載せます。」この話は主人があっさりおことわりした。

ところが世界文藝社から出展の要望がきた。どんな所か一度だけのつもりで出品してみたが、それから三ヶ月はたっていたろう、プラチナ会員として迎えたいとの話。

桂由美さんや遠山敦子さん（新日本国立劇場運営財団理事長・元文部科学大臣）が望んでいる。社長が決めたのだから入会して欲しいとの由。

昨年初出品の折、お二人が私の作品に見入っておられる写真をいただいたが、レセプションの講演が桂由美さん。ブライダル・ファッションデザイナーとしての苦心談に引き込まれ、書作中の自分と重ね合わせて傾聴していた私だった。望まれる時が花。今を生きよう、と入会を決断した。

今年のミネルバ展は、東北・関東大震災から一年目の三月十一日を含んだ日程で行う。テーマは「使命」。被災者の方々に思いを込めて三好達治詩「雪」を書いた。

この世界文藝社の話より先に、パリで日本酒を広める事を目的とした日本酒アートラベル展があった。「風のなかに…」を出品。〝Paris花鳥風月アート特別賞〟を戴き、アートラベルがベルシー美術館に永久収蔵された。

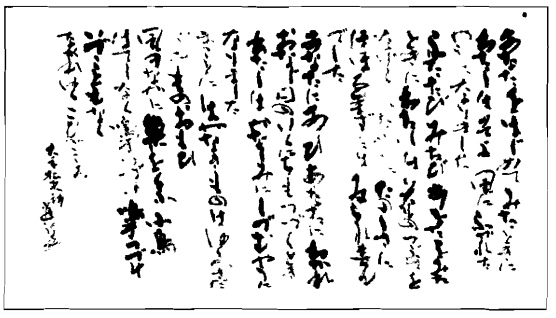
レアアースが豊富なモンゴルとの親交に、芸術を通して役立ちたいと、モンゴル国際大学の敷地内に美術館を建てた某社から、同作品を二十センチメートル四方の陶版にして壁にうめ込みたい、学生に授業をして欲しい旨の話や、超一流仮名書家たちが前面に載っている本の後の方に載せたい…等、こうしたおさそい話が、私を勇気付けてくれた事が嬉しい。字に意外性が出たりして、前をむいて胸を開いて歩きたくなる。

「風のなかに…」の詩文書は
・自分の文字を創り出した
・詩に衣を着せ、原作の良さを更に高めた

との評価をいただいている。

時流は今や古典の香りのする物へと方向転換が叫ばれている。大展覧会入賞を目指して技術先行となり、心がなおざりになっているのではないかという反省が評論家から示されたり（個展の折、心最優先の私の書にエールを送ってくれた人達が沢山おられた。）打ち壊した文字からはなかなか良い書が生まれにくかったりとか、壊そうにも壊せない人達が多すぎて、古典へ戻れと警鐘が鳴ったり。関東では「近代詩文書」（毎日系）というジャンルが盛んで新しいものを求めてゆく。関西では、「調和体」（讀賣系）といって実用文字を美しく拡大して書くことが好まれて相入れず、右に左に蛇行しながら又新たな創造に向かって行く。

はてしない旅に主人が一生現役を口にした。負けてはいられない。



麻生と共に歩んだ音楽の道

声楽家　宗　いづみ

私がここ麻生の地に引っ越して来たのは約四十年前、まだ地名に字が付き、新百合ヶ丘駅の影も形も無い頃でした。音大に入学した私は、音楽の道をまっしぐらに歩き始めました。

やがて麻生区誕生、演奏活動一辺倒だった私にも転機が訪れます。堅苦しく思われがちなクラシック音楽をもっと身近に感じて欲しい、麻生を音楽のあふれる街にしたい、との思いが膨らみ、地域に根差した文化活動の大切さに気付いたのです。文化協会で諸先輩の先生方が目指して来たことに、やっと私も目覚めたと言うところでしょうか。

まずは麻生音楽祭や麻生区合唱連盟の活動を通して、〝演奏する楽しさ〟、〝聴く楽しさ〟、〝裏で支える楽しさ〟をアピール。今では合唱団だけでなく、器楽団体、学校関係、オーケストラの皆さんと絶妙な連携を取り合いながら、音楽文化の向上に力を注いでいます。音楽祭二十周年を記念して、私の長い間の念願だった麻生区の歌『かがやいて麻生』が出来た時の嬉しさは格別でした。

若手音楽家を〝育てる楽しさ〟は「あさお芸術のまちコンサート」の立ち上げの一つの目標でもありました。こちらも年々活動の範囲を広げ、麻生にしっかりと根を張りつつあります。

十年間、麻生市民館運営審議会にかかわり、文化、芸術、音楽、生涯学習に関する数々の提言をさせていただきました。

個人的には、麻生老人福祉センターでコーラス講座の講師を続けて二十一年になります。その間の受講生は延べ四千八百人以上。そして、平均年齢七十九歳の合唱団『コーラス銀の会』を始め、四つの合唱団を指揮・指導し、その傍ら合唱曲の作詞や編曲、ミュージカルの振付などを手掛け…と、どっぷりと音楽に浸った毎日です。

また、旧姓の『吉村泉』で演奏活動も続けています。メゾソプラノ歌手として、テノールの主人と共に麻生市民館大ホールで毎年開催している『クリスマス・ホーム・コンサート』は、今年で第二十七回を迎えることになりました。日本各地の他、イタリア、ドイツなど海外でのコンサートも積極的に行なっています。ペルーのコンサートで沖縄民謡を方言で歌ったところ、沖縄から移住された方々に大変喜ばれたこと、また、ドイツの室内合奏団やロシアの名バス歌手の方を招いて市民館で共演したことなどは、特に心に残っています。その他、現在五つの合唱団の伴奏ピアニストを務めています。

思えば私の音楽活動は麻生と共に始まり、麻生と共に歴史を刻んで来ました。麻生に音大が出来、そこここで質の高い音楽会が開かれ、いつの頃からか麻生区は〝音楽のまち〟、〝芸術のまち〟と呼ばれるようになりました。長いようでアッと言う間だったこの道のりを振り返り、私は一人深い感慨に浸っています。

平成二十三年度（十一月五日）

第二十三回 麻生区文化協会俳句大会

実行委員長 本玉 秀夫

川崎市長賞
三陸の弱音吐かざる鉄風鈴　麻生区　有我　行子

川崎市議会議長賞
みづうみを闇に返して花火果つ　麻生区　藤田　風樹

川崎市教育委員会賞
星月夜語りかけたき星一つ　世田谷区　原　佳月

麻生区長賞
絵手紙の写楽ふらりと暑気見舞　麻生区　大谷　巒水

麻生市民館長賞
麦笛を吹く少年の空広し　麻生区　川嶋　正子

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
折鶴に息を吹き込む敗戦忌　麻生区　本玉　秀夫

川崎市俳句連盟会長賞
つなぐ手のある幸や盆踊り　平塚市　松野　雅雄

川崎市観光協会連合会会長賞
ランドセル少年汗を放り出す　麻生区　馬場身江子

麻生観光協会会長賞
生き甲斐を楽しむ生活秋ともし　町田市　谷　文香

麻生区文化協会会長賞
どの子とも住まぬ余生や鰯雲　港区　彦坂　秀窗

平成二十三年度俳句大会席題俳句
席題「生」「道」当季雑詠に詠み込み

乗り替へて又道連れの鰯雲　池内　英夫
みんな冬の背中となりて朝の道　堀内よし彦
道標は江戸へ二十里蕎麦の花　落合　芦州
俳諧に生きる至福や桃青忌　彦坂　秀窗
長谷寺に裏道ありて石蕗の花　鷲澤　一夫
山里に生きて今年も柿すだれ　山下やよひ
津波禍の道なき荒地（あれ）草紅葉　有我　行子
ここよりは鎌倉古道鵙日和　都留　嘉男
近道に後悔をせり薮風　久保倉和美
愚直なる余生安泰根深汁　鈴木　翠明

平成二十三年度俳句講座開催

・八月三十日
講師　池内英夫（さざなみ代表）
演題　「俳句と魚の歳時記」・「俳句の実作指導」

・九月六日
講師　坂手美保（お江戸会代表幹事）
演題　「俳句で歩くお江戸日本橋」

・九月十三日
講師　森妙子（文化サロン部部長）
演題　「ボリビアの青い空の下で」

あさおの一大風物詩

第九回 あさお古風七草粥の会大盛況！

正月の一大風物詩となっているあさお古風七草粥の会が一月七日、文化協会主催の区協働事業として区役所広場において開催された。

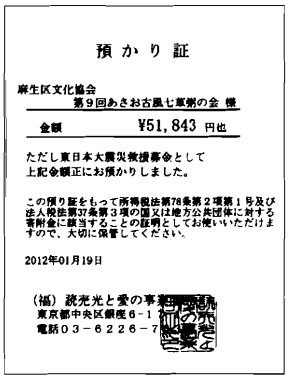
晴天の土曜日とあって、幼い子ども連れも多く、老若男女が開会一時間前には長蛇の列となり、待って頂くのが申し訳ない程であった。十一時開始、古風七草粥由来の焼き餅入り粥は好評で、昨年より百食多い九百食が一時間余りで配り終えるほどの大盛況でした。

一月五日、古沢での七草摘みを会員やボランティアが行い、六日は市民館調理室で、七草の下拵え、地場産の米、大根を用いての仕込みに引き続き、当日も早朝から粥炊き、配食と女性会員が割烹着姿も凛々しく大急がしの大活躍でした。会場の一角では早野聖地公園里山ボランティア提供の炭を使い、コンロを囲み餅焼きする男性会員が楽しそうに語らう姿を、親子連れが珍しそうに眺めている風景もなかなかのものでした。

来場者は、七草粥を味わいながら、広場で繰り広げられる童謡を聴き、正月遊びや片平のお囃子、腹話術をたのしみ、書家笠原秋水氏の見事な揮毫に感動されるなど今年も正月の文化伝承に繋がる良いあさお古風七草粥の会でした。

「東日本大震災義援金」の呼び掛けには、総額五万千八百四十三円の募金があり、早速、読売光と愛の事業団に送金できました。来年は、区政三十周年記念の年、古風七草粥の会も第十回となるので、冠事業として取り組みたいものである。

（橋本　周）



預かり証

麻生区文化協会
第9回あさお古風七草粥の会 様

金額　¥51,843 円也

ただし東日本大震災救援募金として
上記金額正にお預かりしました。

この預り証をもって所得税法第78条第2項第1号及び法人税法第37条第3項の国又は地方公共団体に対する寄附金に該当することの証明としてお使いいただけますので、大切に保管してください。

2012年01月19日

（福）読売光と愛の事業団
東京都中央区銀座6－1
電話03－6226－7

麻生区のルーツを訪ねて① 都筑郡

文　千坂　隆男
写真　小田島　寛

二月十九日、川崎市立柿生中学校の玄関前に集合する。真新しい建物に案内板が付いている。「柿生郷土史料室」この部屋を作った人々の思いが感じられる表札である。

元校長の板倉敏郎先生が暖房を点け迎えてくれた。「此処は博物館と違い、手に取ってみていただけます。」貴重な地域の出土品を、手で触り重さや土器の厚さを確かめることができた。薄汚れた和綴じ本を見せ、「どうしてこんなに汚れているか分かりますか」と質問された。「江戸時代は、一般庶民は蔵書という考えはなかった。全て貸本です。」大勢の人々の手垢とつばにまみれた和綴じ本は、不潔というより愛おしさを感じさせた。縄文、弥生、古墳時代と分類された土器の配列は、博物館に負けない整然としたものである。

板倉先生の熱のこもったお話

稲荷前古墳へ坂を登る

（柿生～市ヶ尾線）のバスは日曜日にもかかわらず一時間に四・五台出ている。「水道局前」で降りると、「稲荷前古墳」に至たる専用の階段道がついてある。古墳は十六基発見されたが、私有地のため今では新しい住宅が建ちならび、三基のみが公園として保存されている。台上に上がると遥か富士の峰が、丹沢の山々が、そして周囲を多摩の横山が取り巻いている。「都筑」を治めた郡司の名は残されていないが、この丘に自分の墓を築いた気持ちはなるほどと思われる。厳寒の二月にもかかわらず、風もなく温かい日だまりで昼食を済ませさらに住宅の中を歩く。

市ヶ尾横穴墓遺跡に到着

横浜市立市ヶ尾小学校の隣に「市ヶ尾遺跡公園」があり、A群十二基B群七基の横穴墓がある。これは朝延より高塚の制作を禁じられたことと「稲荷前古墳」のころと比べ財力が無くなったことを示している。しかし横穴の前に葬祭の儀式をする広い庭をもっている。古代の族長クラスの力が分かる遺跡である。

「都筑郡」を知るためには、横浜市営地下鉄センター北にある「歴史博物館」と「大塚・歳勝土遺跡公園」を訪ねて欲しい。

「撮影所のような大学にしたい」
開学一周年を迎える日本映画大学

日本映画大学（学校法人神奈川映像学園）を訪ね、須藤広報部長にお話を伺った。大学の前身は巨匠今村昌平監督が一九八五年に設立した日本映画学校だ。大学を作りたいという今村監督の思いは、昨年四月、白山キャンパスが完成し一年生百五十名を迎え、ようやく成就した。

普通の大学と違って、入学するとすぐ映画作りの基本となる「人間総合研究」を学ぶ。六クラスに分かれ、一グループ一テーマを選んで、フィルムを使わずに写真で構成するドキュメンタリーを制作、グループで発表する。一年生後半になると実習が始まる。麻生のどこかの街角で、写真のような実習風景が見られる。

月～木は映画作り、金土は座学で語学、映画理論、技術科目を学ぶ。佐藤忠男学長の「撮影所のような大学にしたい」という方針に従って、カメラ、録音、編集など全て先生は現役の映画スタッフだという。

卒業後必ずしも映画人を目指す必要はないという。映画を作ることを通じて、どの仕事にも必要なコミュニケーション力が身につく。「脚本が読める魚屋がいてもよいじゃないか」という今村監督の思想が生きている。三年後に、どんな卒業生が社会に巣立つか楽しみだ。

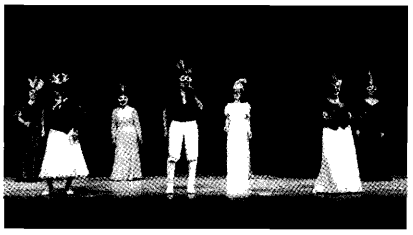
（佐藤勝昭）

「サロン・ド・シャンソン」
二十周年記念発表会

佐藤百合子

「サロン・ド・シャンソン」は、麻生市民館の成人学校「シャンソン・季節を歌う」を受講した人達と発足させた会です。アズナブール、トレネ、レオ・フェレ、ブレル、ピアフ他シャンソン歌手の原曲を聞き、訳詞を歌います。歌う人によって異なった色合を見せるのも魅力の一つです。

文化協会の後援を頂き、昨年十二月に行われた二十周年記念発表会の舞台では、二十年歌って来た十名で手作りのヴェネチア仮面を付け「パリの屋根の下」「パリ野郎」を歌い、歌い続けてこられた感謝の想いと共に歩んだ時の流れを各々が感じた瞬間でもありました。



編集後記

▼からむし五十二号が発行される時にはあの大震災から一年が過ぎますが、被災地ではがれきの処理が五パーセントしか進んでいない状況です。本市では受け入れ・処理が表明されましたが、一日でも早く被災地の復興を進めるためには全国の協力が欠かせないと思っています。

▼今回の会報「からむし」は区制三十周年を記念して、今までと少し違った企画も検討し、区内で芸術活動・文化活動に活躍している方々、そして初代区長にも筆をとっていただきました。ありがとうございました。

（岩田記）

関森 田鶴子・岩田 輝夫・畔田 二郎
千坂 隆男・橋本 周・佐藤 勝昭
小田島 寛

麻生区文化協会会報
からむし 第五十二号
平成二十四年三月三十一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子
編集 麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
麻生文化センター内
☎ ○四四－九五一－一三〇〇
印刷 (株)エリアブレイン